

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

2 ふるさとの名は豊バヤンノールかな湖

第二日め（三月十七日）

午前六時半、起床。ゲルの外には雪が少々のかつている。

いまは、あられ模様。外気の気温はちょうど零度。きのう大きなゲルの外側にたてかけておいた温度計がしめす。曇天のためにさほど冷えていない。

四つのゲルが一直線にならぶ宿营地。東の二軒が分家で、西の二軒が本家にあたる。テントが四つで、世帯は二つ。ならぶゲルの後方に、泥でかためた納屋が二軒。東のそれは、東の分家、西のそれは西の本家が利用する。分家は納屋として、本家は台所として利用する。東の分家から東の納屋までのあいだには、背の高い風見鶏がたつ。風力発電だと知れる。テレビのアンテナも立っている。

東の納屋から少々はなれた外側に、燃料をつみあげた山がある。ウシの糞をかわかした燃料。それは「アルガル」とよばれ、それをあつめてきずいた山は「ノロー」つまり「背」とよばれる。牛糞の山の背は三本みえる。そのうちの一本には、良質な石炭もつみあげられている。

四つのゲルの南方には、四角い石垣がある。石垣の方向は、ゲルのつくるラインと平行。つまり、これも北西を背にして南東に入口を向けている。石垣の中には干し草がつみあげられている。石垣の背面にも、泥でかためた納屋がある。全体が家畜の囲いとなっている。



ゲルと納屋

四角い石垣からさらにずっと南方に、丸い石垣がある。これも家畜の囲い。さらにずっと南方に、^{かかし}案山子のようにみえる石の柱。これは、かつての石垣の名残だという。

これぐらいまでの範囲がいわゆる宿营地である。これを人びとは「ホト」とよぶ。世帯は「アイル」とよばれ、ここでは、二つのアイルで一つのホトになっている。このように宿营地を共同利用する集団を「ホト・アイル」とよぶ。直訳して「宿营地・世帯」というのは、いわば共同設営集団の意味。

この宿营地ホトには、すぐそばに井戸がない。井戸は南方約二キロにある。牛車で三日に一度水くみにゆく。

この井戸を共有する設営集団が、井戸の南方付近にある。老父母にとつての、次男夫婦と二番めの娘夫婦たちが住んでいる。老父母と同居する息子たちからみれば、兄弟たちにあたる。

この南の集団には三つのテント。西の一つが次男夫婦のゲル。東の二つが二番めの娘夫婦のゲル。

そのうち小さなほうは台所専用。西方のゲルと東方のゲルとのあいだに、石垣の家畜囲い。三軒で二世帯。二世帯で一宿营地。これもまた二つのアイルで一つのホトを形成する「ホト・アイル」である。

南の集団のさらに南方に、丘がひろがる。丘にのぼると、手前の南家から後方の北家までをはるかにみわたすことができる。これらをひとまとめにしてもまだ行政単位とはならない。丘にのぼってもみえないが、丘のうねりにかくれて、一つの設営集団があるという。

そこに、老夫婦にとつての長男夫婦がいる。長男の嫁の弟夫婦と一緒に設営している。これもまた二つの世帯で一つの宿营地となっている「ホト・アイル」である。南の集団の東方にあるので、東の集団、東家とよんでおこう。ゲルは二つ。

北と南と東の三つの集団をあわせると、ゲル（テント）は九つ、アイル（世帯）は六つ、ホト・アイル（設営集団）は三つ。これもまた一つの「ホト」だという。

このような「ホト」をさらに九つあわせて総計六十五戸を集合とみなしたとき、最小の行政単位とかななる。これが「ガチャ」である。

ダンゼン一家が所属するガチャは、バヤンノールと命名されている。「豊かな湖」という地名である。ここから南東約十キロメートルに、その豊かな湖はある。そこにはバヤンボラクすなわち豊かな泉がある。石垣で囲まれたその泉は、年中不凍の間欠泉。その石垣が、ガチャの南西限であるという。西はウリヤーオボーまで、東はバヤンノールまでという。

北東限はホンコルのシレー。ホンコルとは、「くぼみ」のこと。シレーとは、そのくぼみのふちのこと。

このあたりには、広い円形のくぼみが多い。カルデラ型の火口原がいくつもある。そのひとつを利用して、ダンゼン家の東方にはオブスン・フレー「草囲い」がもうけられている。くぼみを石垣で囲み、



宿営地から放牧に出発するヒツジ、ヤギの群れ

そのなかに家畜をなるべく誘導しないようにしている。日常の放牧地として利用しないのである。そうすることによって草丈をのばす。ところによっては草刈場を利用するフレーもあるが、ここではいざというときに利用する。緊急時の放牧地となる、囲いこみ草地である。くぼんだ地形が、風よけ地帯として活用されている。かつての火山のあとが、すべて有用とはかぎらない。硫黄を多くふくんだ池もたくさんある。家畜はけっしてその水を飲まない。

バヤンノール・ガチャの東に、バヤンオンドル・ガチャがある。バヤンオンドルとよばれる山の名にちなんだガチャである。豊かな高さという名前。バヤンノールの西には、ヤラルト・ガチャ勝利という名は、革命の歴史がうんだ地名。北には、ウルジードルゲル(幸の広がり)とハーンオール(王の山)の二つのガチャ。これら五つのガチャがまると、つぎの行政単位「ソム」になる。さらにソムの上位が「ホシヨ(旗)」で、さらに上位が「アイマク(盟)」である。

だから、中国内蒙古自治区シリンゴル盟アバハナル旗ヤラルト・ソム、バヤンノール・ガチャというのがダンゼン一家の住所になる。アバハナル旗は現在シリンホト市の区域として編成されている。

ソムはかつての人民公社に相当し、ガチャはかつてのブリガード（隊）に相当する。伝統的な単位である「ホト」が、集合されて隊となり、さらに公社とされた集団化時代があった。

それ以前には、海をわたってきた日本軍を追いはらうために北からロシア軍がやってきた。大勢の家畜と男がつれさられ、女がみごもった。文化大革命の不幸な十年間においても、略奪行為は正当化された。文化大革命は一九七七年に終結し、集団化時代は一九八三年に終止した。今日、家畜は私有化されている。

半世紀の歴史の風が、モンゴル高原をふきぬけた。いまは、ずいぶんおだやかなのかもしれない。それにしても、自然の風はおだやかならぬ。一日中、台風なみの強風。ゲルのまうしろから吹いてくる。北西の季節風。

わたしは、温度計がふきとばされないようにと、ゲルのフェルトをおさえているロープのあいだにはさみこんだ。

ところで、宿営地をあらわす「ホト」という語は、シリンホトのホト、フフホトのホトである。すなわち町の意味でもある。いったいどうなっているのだろうか。

考慮する空間の範囲がどんなにひろがっても、アイルという語のしめす意味は、つねに一定している。すなわち世帯。

いっぽう、考慮する空間の範囲がひろがると、ホトという語がしめす領域はひろがる。一番小さなホトは、設営地の空間をさしめす。そのホトを構成する集団のなかみが「ホト・アイル」とよばれる設

営集団である。その「ホト・アイル」をかりにアイルとみなして集合させれば、より広範囲で、上位概念のホトになる。より広いホトを構成するアイルの数は増加する。こうして、戸数や人数や空間を拡大した結果、町という概念に到達する。

ホトの原義はあくまでも宿営地で、具体的にはヒツジの寢床をさしていた。それはもともと非固定的な、人のすむ場所をさす。

現代の都市ホトもまた、本来はそのような概念でなりたっていた場所であることを、ホトという語がしめしている。ホトは、ヒツジの寢床から北京のような大都会までを自在にワープすることばなのである。

風はどんどんつよくなるいっぽう。